

## 2019年度光産業技術標準化国際シンポジウム

2019年度の光産業技術標準化シンポジウムは、「レーザ安全の法規制と標準化」をテーマに、公益財団法人JKAのサポートを受けて、国際シンポジウムとして欧州のレーザ安全の専門家を迎えて、2020年2月21日（金）ホテルメルパルク大阪にて、36名の参加者の下、開催された。



会場風景

まず、開会挨拶において、当協会副理事長兼専務理事の小谷泰久より、欧州では欧州指令を契機として消費者用レーザ機器の新しい安全規格が作成の最終段階を迎えており、そのプロジェクトの当事者であるRobert Bosch社のAnnette Frederiksen氏をドイツから招聘し、その概要と新しく導入された概念について講演いただくことを紹介した。また、日本からは、大学から橋新裕一教授（近畿大学）、国土交通省から吉田茂樹氏（運輸安全委員会）、産業界から野村恒治氏（ソニーイメージング・プロダクツ&ソリューションズ（株））を招聘したことを紹介した。



橋新 裕一 教授



Annette Frederiksen 氏

最初の講演者である近畿大学の橋新 裕一教授には、「レーザ安全性に関する最近のトピックスレーベンポインタの事件報道を中心に」と題して、日本のレーザ関係法規制および事件報道されたレーザポインタの事故例について解説いただいた。レーザ登場から60年が経過し、各種レーザ応用製品の登場、普及、拡大が続く中、一般消費者が使用するレーザ製品も増加している。事件・事故による風評被害は、レーザ産業の発展

の流れを阻害する要因となるので、国民の安全を確保し安心してレーザ機器を使っていただけるよう、レーザ関連団体と関連省庁とが協調して情報発信・安全教育などの啓発活動を続けていく必要性があることを、橋新教授は強調された。

続く講演者のドイツAnnette Frederiksen氏からは、「消費者用レーザ機器のための新しい欧州安全規格—その背景と進展」と題して講演いただいた。Frederiksen氏は、欧州電気標準化委員会および国際電気標準化委員会で、それぞれレーザ機器の安全性委員会（CLC/TC 76およびIEC/TC 76）の幹事および副幹事として活躍され、国際標準化の分野で期待されている若手専門家の一人である。欧州電気標準化委員会および欧州指令と欧州規格との間のハーモナイゼーションの解説に続き、制定に向けた最終段階に至っている消費者用レーザ機器の安全性に関する新しい欧州規格について、詳細に紹介いただいた。



吉田 茂樹 氏



野村 恒治 氏

休憩をはさんで、その後の講演者の国土交通省 運輸安全委員会 神戸事務所の事故調査官である吉田 茂樹氏からは、「船舶における高出力レーザポインタ使用の危険性」と題して講演いただいた。吉田氏は、外国航路および内航航路に航海士および船長として乗船経験を持たれており、その経験も踏まえ、衝突警告として間違って用いられている高出力レーザポインタの危険性を強く訴えられた。

最後の講演者のソニーイメージング・プロダクツ&ソリューションズ（株）野村 恒治氏からは、「レーザプロジェクトにとっての安全性規格と各国認証」と題して、講演いただいた。野村氏は、入社以来、一貫してプロジェクト事業に関わってこられ、この10年間はレーザを光源とするプロジェクトの普及環境を整備する活動を行っており、レーザ光源プロジェクト市場を大きく成長させるのに貢献されている。その経験から、背景となる安全性規格と各国認証の取得への取り組みについて、分かりやすく紹介いただいた。

、今年度も有意義な講演がそろった光産業技術標準化シンポジウムであったが、新型コロナウイルス感染拡大が懸念される中、参加を断念された申込者も多くおられた。そのような状況下で海外および国内からシンポジウムに話題提供いただいた4名の講演者の方々に、改めて御礼を申し上げる。

